

# グループ合宿における自己開放性

教育心理学研究室

飯 長 喜 一 郎

## Self-Disclosure in an Encounter Group

Kiichiro IINAGA

The purpose of this study was to examine the relations between the self-disclosure measured by JSDQ type questionnaire and the real self-disclosure in an encounter group (mainly to test the validity of the questionnaire).

There were four hypotheses. ① The past self-disclosure on topics of low intimacy values will not correlate to the self-disclosure and the self-concealment in a group work. ② The past self-disclosure on topics of high intimacy values will correlate positively to the self-disclosure and negatively to the self-concealment in a groupwork. ③ The willingness to disclose self in a group work will correlate positively to the self-disclosure and negatively to the self-concealment in a groupwork. ④ The willingness to disclose self on topics of high intimacy values will correlate more highly to the self-disclosure and the self-concealment in a group work than the willingness to disclose on topics of low intimacy values.

Almost all the correlations obtained seemed to have tendencies to support the hypotheses with no contradiction. But, only some parts of correlations were statistically significant. There seemed to be a possibility of a validity of JSDQ type questionnaire of self-disclosure. It's too early to conclude that JSDQ has no validity until we examine the construction of the questionnaire and analyze the situations of self-disclosure in a detail.

- I 問題
- II 方法
- III 結果
- IV 考察
- V 要約

### I 問 題

Jourard & Lasakow (1958) が自己開放性という概念を用いた最初の調査を発表してから、まもなく20年になるろうとしている。

「自己開放性 (自己開示性)」(Self-Disblosure) は次のように定義されている。「自分についての個人的情報を、どれ位、他者に与えるか。すなわち、自分についてどれだけ他者に語るか。」

当初、Jourard の個人的関心 (Jourard, 1964) から出発した研究は、その後、社会心理学、人格心理学、臨床

心理学の分野に広がり、多くの研究論文が発表されている。

それら自己開放性に関する研究のほとんどは、Jourardら (Jourard & Lasakow, 1958) で作成した、60項目からなる自己開放性質問紙 (Jourard's Self-Disclosure Questionnaire, 略して JSDQ) およびそれらの短縮版 (40項目, 25項目, 15項目) ないしは、一部改訂版を中心にして行なわれてきている。(これら JSDQ の詳細は、Jourard, 1971に Appendix としてのっている。) JSDQ は自分に関するさまざまな情報を他者にどれくらい話したことがあるか、被験者に3段階で自己評定してもらうものである。

人格心理学、臨床心理学からの関心は、主として、自己開放性と人格や精神的健康との関係、および、臨床的場面 (グループワーク、グループカウンセリングと個人面接) における自己開放性の研究に向いている。

自己開放性と人格や精神的健康の関係については、

JSDQ と MMPI (Truax & Wittmer, 1971; その他)や Maudsley Personality Inventory (Stanley & Bownes, 1966; その他) など他の質問紙との関係を調べたものが主である。これら研究の結果は、さまざまであり、JSDQ と適応や精神的健康との間に正の相関関係の見出されたもの (Pederson & Higbee, 1969; その他), 負の相関関係の見出されたもの (Truax & Wittmer, 1971; その他), 有意な相関関係が見出されなかったもの (Jourard, 1964; その他), いずれも数多く存在する。これらの研究を概観して Cozby (1973) は次のように書いている。「開放性と (精神的健康を含む) 種々の人格特性との間に、一般に低い相関関係しか見られないひとつの要因は JSDQ の使用ではないだろうか。JSDQ は他者に対する実際の開放性を予測するようには見えない。JSDQ は、せいぜい開放性の過去の歴史の尺度として考えられるにすぎない。…(中略)…おそらく、開放性のよりセンシティブな尺度は知りあいや、初めて会う人や、実験者に (自己を) 開放する意志を被験者が持っているかどうかであろう。」(Cozby, 1973, p 80)

実際、Drag (1968) は、40 項目の JSDQ で過去の開放性と、将来、初めて会った人に対する被験者の自己開放の意志を同時にたずねており、Jourard (1969) はそれを紹介している。Drag (1968) の主な結果は次のようであった。実験前に実験者とあまり個人的に会話をしない場合には、被験者の開放性の意志の測定結果は、実験中の被験者の実験者に対する実際の開放性を予測した。(Jourard, 1969, Chapter 15)

Drag の研究は、ある条件では、JSDQ が予測的妥当性があることを示しているともいえるが、JSDQ の妥当性については他に多くの研究がある。(Ehrlich & Gajevan, 1971; Himelstein & Kimhrough, 1963; Hurley & Hurley, 1969; Pederson & Breglio, 1968)

しかしそれら妥当性研究の多くは、Drag の研究に反し、JSDQ の妥当性について否定的である。Cozby は、これら妥当性研究をまとめて「JSDQ が実際の自己開放性を正確に予測しないのは明らかである」(Cozby, 1973, p74) といっており、その原因を、JSDQ で測定する開放性の相手(父、母、男の友人、女の友人、配偶者)と、実験で開放性を示す相手(実験者、初めて会った人など)が違っていることに求めている。

Cozby もいうように、Drag(1968)は、一般的に JSDQ の妥当性を検証しているわけではなく、開放性に対しては状況が重要な要因になることを示しているにすぎないともいえる。

一方、Hurley ら (Hurley & Hurley, 1969) は、グ

ループ・ワークの参加者50名について自己開放性の妥当性の研究を行なった。彼らは10週間にわたって、1週1回のグループ・セッションの参加者に、60項目の JSDQ と、彼ら自身で作成した自己開放性の3種類の相互評定、(a)HSDR (Hurley Self-Disclosure Rating), (b)DDR (Direct Disclosure Rating), (c)MON (Most-Open Nominations), を行なってもらい、さらに、(d)MCN (Most-Closed Nominations) を行なってもらった。HSDR については詳細は不明である。DDR は「(a)全く自己開放しない。」から「(e)非常にしばしば自己開放する。」までの5段階で参加者が相互に自己開放性を評定するものである。また、MON と MCN は、グループで最も開放的な人と、最も閉鎖的な人の名前をあげてもらうものである。彼らの主な仮説は JSDQ と HSDR, DDR, MON とには正の相関関係、JSDQ と MCN とには負の相関関係が見られるであろうというものであった。それによって JSDQ の構成的妥当性を検証しようとしたわけである。結果は、ほとんど有意な関係が見られなかったばかりでなく、むしろ逆の傾向さえ示唆されたのである。

しかし、彼らの使用した JSDQ は、過去に自分に関する情報を与えた相手 (ターゲットパースン) として親 (父母を分けず), 親友 (男女を分けず), とグループ (2名以上の集団) を採用していた。それに対して、実際に実験で自己開放性を測定したのは、グループワークにおける大学生同士の自己開放性であった。さらに、Hurley らは、将来出会うであろう人々に対する自己開放の意志については測定しなかった。

また彼らは、JSDQ の得点を単純に総合計して処理している。しかし、人々が他者に伝える情報には、比較的話しやすいものと、話にくいものがあるはずである。そして、グループワークにおいては、一般に話される話題は、日常のごく表面的で話しやすい情報でなく、むしろきわめて個人的で話にくい情報である。また、他者の話に対する反応も心の深いところから生じてくる反応になりがちである。いくつかの JSDQ の質問紙の中には表面的で話しやすい話題 (Low intimacy) と個人的で話にくい話題 (High intimacy) を区別して示しているもの (Jourard, 1971, Appendix 8, 11) および、その中間 (Medium intimacy) を加えたもの (Jourard, 1971, Appendix 12) がある。が、Hurley らはそれらを考慮しなかった。

以上の考察を加えた結果、本研究では、次のことを目的にした。

① Hurley ら (1969) と類似の手続きにより、JSDQ タイプの自己開放性質問紙の妥当性を検討する。すなわ

ち、JSDQ タイプの質問紙により測定された自己開放性と、実際のグループワークにおける自己開放性の他のメンバーによる評定との関係を検討する。

② 自己開放性質問紙により被験者の過去の自己開放性を測定するだけでなく、グループワークにおいて自己開放する意志がどれくらいあるかも測定し、それらと他者評定との関係を見る。

③ 自己開放性質問紙の結果の集計に際しては、話しやすい話題と話しにくい話題、それぞれについての自己開放性を分離してあつかい、結果を分離して他者評定との関係を見る。

過去の研究結果が輻輳しているため十分な根拠を持った仮説として提示するには若干のとまどいがあるが、一応の仮説として、次のものが考えられた。

① 話しやすい話題についての過去の自己開放性とグループワークにおける実際の自己開放性および自己閉鎖性とは関係がないであろう。

② 話しにくい話題についての過去の自己開放性は、グループワークにおける実際の開放性と正の関係があり、また実際の閉鎖性とは負の関係があるだろう。

③ グループワークに先だって持っている、グループにおいて自己開放する意志は、グループワークにおける実際の開放性と正の関係があり、また、実際の閉鎖性と負の関係があるだろう。

④ グループワークで話しにくい話題について自己開放しようとする意志と、グループワークにおける実際の開放性、閉鎖性との関係のほうが、話しやすい話題について自己開放しようとする意志と実際の開放性、閉鎖性との関係よりも強いであろう。

## II 方 法

### (1) 被 験 者

被験者は、東京大学教育学部教育相談室のメンバー16名であった。男性10名、女性6名であった。年齢は22歳から53歳までで、平均32.4歳であった。カウンセリングの学習、研究歴は0.5年から25年(平均7年)、グループ体験歴は0回から約20回(平均約5回)であった。すなわち、被験者は、年齢、カウンセリング歴、グループ歴からみて、かなり広範囲の人々の集団であった。しかし、いずれのメンバーも教育相談室の週1回のケースカンファレンスの参加者であり、彼らは少なくとも5、6回はケースカンファレンスに参加した経験があった。また、10名は実際にカウンセリングを実践していた。参加者は、ケースカンファレンス以外にも互いに日常的にかな

りの接触を持っている人々であった。なお、Hurleyら(1969)の場合は平均年齢26.3歳および35.8歳の大学院生50名であった。

### (2) グループ合宿

グループ・ワークは合宿の形態をとって行なわれた。1977年8月中旬、4泊5日の日程であった。2~3時間のグループセッションが計9回もたれた。グループ合宿の内容は、いわゆるエンカウンターグループにごく近いものであった。ただ、リーダー(ファシリテーター)なしで行なわれた。16人で1グループを構成していた。Hurleyらの場合は、1週1セッションで計10セッション、1グループ8~9名で、その他にリーダーがいた。

### (3) 尺 度

(a) ISDQ (Iinaga's Self-Disclosure Questionnaire) (付、として項目をあげておいた)

本実験に先だって、自己開放性尺度を作成した。その詳細の紹介は、本論文の目的でないのではぶくが、おおよその手続きを以下に示す。

まず60項目のJSDQその他、Jourardらの研究で採用された質問紙の諸項目に、時事問題等、日本独自の項目を加え、188項目からなる質問紙を作成し、それぞれの項目が「話しやすい話題」か「話しにくい話題」か、青年男女(男性53名、女性63名)に評定してもらった。その後、サーストン法により、反応に極端なバラツキのある項目を除き、またヴァリマックス法による因子分析の結果を考慮して、40項目からなる質問紙ISDQを作成した。ISDQには話しにくさの度合により3種類の項目が含まれている。すなわち、比較的話ししやすいもの(ISDQ・L)20項目、中位の話しにくさのもの(ISDQ・M)14項目、比較的話しにくいもの(ISDQ・H)6項目である。後2者については、結果の処理にあたっては、すべて(ISDQ・M)+(ISDQ・H)をISDQ・MHとして単一にあつかった。各項目はランダムに配列された。ISDQはグループ合宿の始まる直前と、終わった直後の合宿場所で計2回実施された。(ISDQ<sub>0</sub>とISDQ<sub>1</sub>)

ISDQ<sub>0</sub>のインストラクションは次のようであった。「それぞれの話題について、あなたは、どの程度、自分を打明けて話したことがありますか。どの程度、自分の考えを、相手に伝えたことがありますか。また、これからの『グループ』で、どの程度話すつもりがありますか。」ISDQ<sub>1</sub>のインストラクションは次のようであった。「それぞれの話題について、あなたは、どの程度、自分を打明けて話したことがありますか。どの程度、自分の考え

を相手に伝えたことがありますか。また、今回の『グループ』でどの程度話しましたか。」

ターゲットパーソン（話す相手）としては、男性の親友、女性の親友、グループの三つをとりあげた。なお、今回の ISDQ においては「グループ」は、グループ合宿のセッションを意味する。

(b) DDR (Direct Disclosure Rating)

MDN (Most Disclosure Nomination)

MCN (Most Closed Nomination)

セッション中の被験者の実際の自己開放性を測定するため、DDR, MDN, MCN を第4セッションの直後と第9セッションの直後に実施した。(DDR<sub>4</sub>, MDN<sub>4</sub>, MCN<sub>4</sub> と DDR<sub>9</sub>, MDN<sub>9</sub>, MCN<sub>9</sub>)

これら三者はいずれも、他者による評定である。(自己評定を除いて処理した。)

DDR は、第4セッションあるいは第9セッションまでに、話した「量」と「深さ」と「自己開放性」と「卒直さ」を7段階で相互に評定したものである。(それぞれ DDR・量, DDR・深さ, DDR・開放, DDR・卒直と略記する。)

MDN・MCN は、最も自己開放的だった人と、自己閉鎖的だった人をそれぞれ2名ずつ名前をあげてもらい、名前をあげられた回数をカウントしたものである。

### III 結 果

TABLE 1 ISDQ と DDR・開放, 量の関係 (相関係数)

|                   |          | DDR <sub>4</sub> ・開放 | DDR <sub>4</sub> ・量 | DDR <sub>9</sub> ・開放 | DDR <sub>9</sub> ・量 |
|-------------------|----------|----------------------|---------------------|----------------------|---------------------|
| ISDQ <sub>0</sub> | LMH・友人   | .28                  | .10                 | .60*                 | .05                 |
|                   | L・友人     | .13                  | .01                 | .52*                 | .09                 |
|                   | MH・友人    | .40                  | .17                 | .64**                | .01                 |
|                   | LMH・グループ | .44                  | .40                 | .77***               | .30                 |
|                   | L・グループ   | .35                  | .35                 | .69**                | .33                 |
|                   | MH・グループ  | .49                  | .41                 | .79***               | .24                 |
| ISDQ <sub>9</sub> | LMH・友人   | .11                  | -.10                | .49                  | .08                 |
|                   | L・友人     | -.05                 | -.25                | .36                  | .08                 |
|                   | MH・友人    | .25                  | .05                 | .57*                 | .08                 |

\* p < .05

両側検定. 0 以下の TABLE についても同様。

\*\* p < .01

\*\*\* p < .001

TABLE 2 DDR<sub>4</sub>・開放と DDR<sub>4</sub>・量, 深さ, 卒直との関係 (相関係数)

|                      | DDR <sub>4</sub> ・量 | DDR <sub>4</sub> ・深さ | DDR <sub>4</sub> ・卒直 |
|----------------------|---------------------|----------------------|----------------------|
| DDR <sub>4</sub> ・開放 | .84***              | .86***               | .95***               |

再検査法による ISDQ の信頼度係数 (安定性係数) を ISDQ・LMH・友人 (ISDQ のうち, L, M, H の項目すべてについて親友に対して話した度合を合計したもの) について求めたところ, .87であった。十分とはいえないかも知れないが、一応の安定性を示していると思われる。

TABLE 1 は ISDQ と DDR との関係の結果である。DDR<sub>4</sub>・開放と ISDQ<sub>0</sub>, ISDQ<sub>9</sub> の間には、有意な関係はなかった。しかし DDR<sub>4</sub>・開放と ISDQ<sub>0</sub>・友人より DDR<sub>4</sub>・開放と ISDQ<sub>0</sub>・グループのほうが、相関係数が高い傾向にあり、また、DDR<sub>4</sub>・開放と ISDQ・L より DDR<sub>4</sub>・開放と ISDQ・MH のほうが相関係数が高い傾向にあった。これらは仮説の方向と一致している。(被験者が16名と小人数なため、相関係数の差の検定は行なわなかった。) ISDQ と DDR<sub>4</sub>・量との間には有意な相関はなかった。

ISDQ・DDR<sub>9</sub>・開放との間には、ISDQ<sub>9</sub>・LMH・友人および ISDQ<sub>9</sub>・L・友人と DDR<sub>9</sub>・開放の関係を除いて、いずれも、かなりの有意な相関が認められた。(.52~.79) また ISDQ<sub>0</sub>・友人より ISDQ<sub>0</sub>・グループが、ISDQ・L より ISDQ・MH が、DDR<sub>9</sub>・開放と高い相関を持つ傾向にあり、これも仮説で予測した方向と一致する。

ISDQ・DDR<sub>9</sub>・量との間には有意な関係はなかつ

TABLE 3 DDR<sub>9</sub>・開放と DDR<sub>9</sub>・量, 深さ, 卒直との関係 (相関係数)

|                      | DDR <sub>9</sub> ・量 | DDR <sub>9</sub> ・深さ | DDR <sub>9</sub> ・卒直 |
|----------------------|---------------------|----------------------|----------------------|
| DDR <sub>9</sub> ・開放 | .58*                | .67**                | .96***               |

TABLE 4 ISDQ と MDN, MCN の関係 (点双列関係数)

|                   |          | MDN <sub>4</sub> | MCN <sub>4</sub> | MDN <sub>9</sub> | MCN <sub>9</sub> |
|-------------------|----------|------------------|------------------|------------------|------------------|
| ISDQ <sub>0</sub> | LMH・友人   | .36              | -.14             | .15              | -.43             |
|                   | L・友人     | .32              | -.01             | .17              | -.47             |
|                   | MH・友人    | .38              | -.26             | .11              | -.37             |
|                   | LMH・グループ | .60*             | -.39             | .27              | -.35             |
|                   | L・グループ   | .55*             | -.22             | .17              | -.33             |
|                   | MH・グループ  | .61*             | -.53*            | .25              | -.35             |
| ISDQ <sub>9</sub> | LMH・友人   | .28              | -.02             | .06              | -.25             |
|                   | L・友人     | .21              | .17              | .12              | -.17             |
|                   | MH・友人    | .31              | -.18             | .01              | -.29             |

た。

TABLE 2.3は DDR・開放と DDR・量、深さ、卒直との関係を示している。DDR<sub>4</sub>、DDR<sub>9</sub>いずれの場合も、相互に有意な相関が見られた。ここで注目に値するのは DDR<sub>4</sub>の場合、全体に相関が高いのに比して、DDR<sub>9</sub>の場合、開放と量、深さの関係については相関が低くなっていることである。特に、DDR<sub>9</sub>・開放と DDR<sub>4</sub>・量との相関係数は、.58と最も低くなっている。

TABLE 4は ISDQ と MDN, MCN との関係を示している。ISDQ と MDN はいずれも正の相関で、特に ISDQ<sub>0</sub>・グループと MDN<sub>4</sub>の間には有意な相関が見られた。ISDQ と MCN の相関係数はひとつ (ISDQ<sub>9</sub>・友人と MCN<sub>4</sub>の間)を除いてすべて負になっている。そのうち、ISDQ<sub>0</sub>・MH・グループと MCN<sub>4</sub>の相関係数は有意であった。この結果は、Hurley & Hurley (1969) の結果と正反対である。

ISDQ<sub>9</sub>・グループは、他のいかなる測定値とも相関が認められなかった。ISDQ に含まれている話題が、現実にグループの中で直接話されることがほとんどなかったために、ISDQ<sub>9</sub>・グループは実際上意味をなさなかった。そのため、結果も略した。

#### IV 考 察

ISDQ と DDR<sub>4</sub>・開放との間に有意な関係が見出されなかったのは説明にたたくない。

ここでは、グループセッションにおいて、参加者が、自己開放的かどうかを、他のメンバーが、何をもって判断するかが問題になってくる。TABLE 2によれば、DDR<sub>4</sub>・開放は DDR<sub>4</sub>・量と高い相関がある。しかし、TABLE 3によれば、DDR<sub>9</sub>・開放と DDR<sub>9</sub>・量の相関は、有意ではあるが、下ってきている。これは、第4セッションが終った段階では、ある人が話している量と、そ

の人が自己開放的であるということが、あまり分離して考えられていない、見きわめがつかないということを示している。グループプロセスがある程度成熟するまでは、多く語る人が自己開放的と見られがちであることを反映しているのではないか。そうすると、DDR<sub>4</sub>・開放で現われてくる数字上の開放性は、実は真の開放性ではなく、話した量の多少による影響をかなり受けた見せかけの開放性ということになる。

一方、DDR<sub>9</sub>・開放が ISDQ<sub>0</sub>と有意な相関関係があったということは、ISDQ が、ここでは予測的妥当性を持っていたということの意味すると思われる。ここで DDR・開放についてさらに考えてみると、前記の話し量との関係に加えて、DDR・卒直との関係が出てくる。TABLE 2および、TABLE 3は、グループにおける開放性が卒直さと非常に重なる部分が多いことを示唆している。すなわち、ISDQ の結果は、DDR・卒直とかなり重複した内容を持った DDR・開放と相関していることになるのではないか。(TABLE にはのせなかったが、当然 ISDQ と DDR・卒直との相関係数は、ISDQ と DDR・開放との相関係数にきわめて類似していた。) さらにいうと、ISDQ<sub>0</sub>は話題について話したかどうか、あるいはこれから話すつもりがあるかどうかについて質問したものであが、他者に自分について話すということは、必ずしも自分についてたくさん話すということの意味しないのではないか。むしろ、卒直にいつわりなく話すことを意味するのではないか。そう考えると、Jourard が、人間の透明さ (transparency) との関係で、自己開放性を考えたことの妥当さがうかがえてくる。ただ、このような結果になった原因のひとつは、ISDQ のインストラクションにも求められるようである。ISDQ は「…どの程度、自分を打明けて話したことがありますか。…」と質問している。ISDQ<sub>0</sub>を実施したとき「どの程度、打明けて？」と反問してきた被験者がいた。「打

明けて」という言葉が、特に卒直さと関係する透明さのイメージを被験者に与えた可能性もある。いずれにしても、グループプロセスが進むと、開放性および卒直さと、話す量、話しの深さが、次第に分離して見えてくるのではないか。開放性と卒直さとの関係はさらに研究を加える必要がありそうだ。

ISDQ<sub>0</sub>とDDR<sub>9</sub>・開放の間には、ISDQ<sub>0</sub>・MH・友人については有意な関係が見られたが、ISDQ<sub>0</sub>の場合より全体に低めの関係になっている。被験者数が少ないため、この結果の差が、測定誤差に入ってしまう可能性が高いが、あるいは、ISDQ<sub>9</sub>が、グループ合宿の最後の非常にあわただしいときに実施されたこと、および、グループプロセスが進み、各メンバーが心理的に昂揚していたこと、メンバー間の開放性の差が少なくなり見わけがつかなくなったこと（DDR<sub>4</sub>・開放は平均58.63、SD 17.34であり、DDR<sub>9</sub>・開放は平均66.44、SD 12.98であった。）などが影響をおよぼしているのではないかと考えられる。

ISDQ<sub>0</sub>・友人よりISDQ<sub>0</sub>・グループの方がDDR・開放と正の関係が強い方向に向い、ISDQ・LよりISDQ・MHの方が、やはり、DDR・開放と正の関係が強い方向に向っていることが示唆され、今後の研究に道を開いたとはいってよいのではないか。

次にISDQとMDN、MCNの関係について考えてみたい。Hurley & Hurley (1969)の研究では、JSDQ<sub>1</sub>とMONは相関があるとはいえず、JSDQ<sub>1</sub>とMCNとは-0.30の相関があった。つまり過去の自己開放性の高い人ほど、グループでは自己閉鎖的だったという結果であった。

今回の研究では、ISDQはMDN、MCNと、そのような矛盾した結果を生じていない。ISDQとMDNは正の相関関係に向い、ISDQとMCNはひとつを除いて負の相関関係に向っている。これは、理論的に、当然予想される方向と一致している。有意な関係は一部に認められたにすぎないが、少なくとも、開放性とMDN、MCNが、Hurleyらのように無関係ないし逆の関係であるとはいえない。

以上をまとめてみると、仮説であげた4つのポイントについては、一部では実証され、一部では実証されなかったという言い方が適当であろう。すなわち、全体的な傾向としては、おおむね仮説で予想された方向に向って結果が得られたということであり、また一方、それら結果は仮説を十分に支持するレベルには達しなかったということである。

JSDQタイプの質問紙の妥当性は少なくとも、Cozby

やHurleyらのように否定しきるものではなく、質問紙の具体的内容の吟味と、実際行動の場面のいかんによっては、存在しうるものが明らかになったといえるのではないか。例えば、今回の研究の結果、もともと親しい人間が集まって、自由にエンカウンターグループを行なうときには、JSDQタイプの質問紙、そのうち特に、グループに対する自己開放性の意志の測定結果は、予測的妥当性を持ちうるものが明らかになった。

JSDQは、もともとごく素朴な発想から出発している。そしてJSDQタイプのできあがった質問紙は多く発表されていても、その作成手続きの詳細は発表されていないことが多い。また、質問紙の内容の分析をあまりすることなしに、比較的気軽に使用してきたように思われる。大づかみに、自己開放性の発達の変化を調べたり、国際間比較をする場合には、それでも何らかの結果が出るから、それなりの存在価値はあったであろう。しかし、もっと微妙な人格特性や、具体的臨床的な対人関係場面での行動との関係で自己開放性を考えるときには確実な結果は得られないであろう。例えば、今回は、当初、主として被験者の負担をへらすという理由でターゲットから父母をはぶいた。しかしPederson & Higbee (1968)によれば、父母に対する開放性と、友人に対する開放性の関係は有意ではあるが、あまり高くない(.35前後)。このことを考えると、もし、今回ターゲットに父母も加え、父母に対する開放性と友人に対する開放性の総計をもとにして研究を進めていたら、全く関係は見出されなかったと思われる。

また、Truax & Carkuff (1965)が、非行少年のグループカウンセリングで、自己閉鎖的だった者の方が、正の人格変化を生じたことを報告していることなどは、臨床場面での自己開放性の問題の複雑さを示している。

臨床心理学との問題で考える場合、自己開放性は現実の行動レベルでとらえ、考えることが中心になっていくであろう。しかし、臨床的場面で生じる諸現象を、人間の精神的健康あるいは、積極的適応といった、より広い視野から見ようとするとき、質問紙による自己開放性の測定は、臨床的場面と、社会との関係を考える際のひとつの武器になるのではないか。そのためにも、臨床的場面における質問紙と評定という両面からの自己開放性の研究が待たれる。

## V 要 約

本研究は、質問紙によって測定された自己開放性と、グループ合宿における実際の自己開放性との関係を調べ

ること（主として質問紙の妥当性の検証）を目的として行なわれた。

仮説としては次の4つが考えられた。

① 話しやすい話題についての過去の自己開放性と、グループワークにおける実際の自己開放性および自己閉鎖性とは、関係がないであろう。

② 話しにくい話題についての過去の自己開放性は、グループワークにおける実際の開放性と正の関係があり、また実際の閉鎖性とは負の関係があるだろう。

③ グループワークにおいて自己開放する意志は、グループワークにおける実際の開放性と正の関係があり、また、実際の閉鎖性とは負の関係があるだろう。

④ グループワークで話しにくい話題について自己開放しようとする意志と、グループワークにおける実際の開放性、閉鎖性との関係の方が、話しやすい話題について、自己開放しようとする意志と実際の開放性、閉鎖性との関係よりも強いであろう。

ほとんどのデータが、仮説で予想された方向に矛盾なく向いていたが、仮説が十分立証されるレベルには至らなかった。しかし、少なくとも JSDQ タイプの自己開放性質問紙が、妥当性を持たないと結論づけるのは早急であると考えられた。そして、質問紙のより精密なる構成と、現実の自己開放状況の緻密な分析の必要性が論じられた。

（註）この研究は、昭和52年度の文部省科学研究費による研究「カウンセリングにおけるコミュニケーションに関する心理学的研究」（研究代表者、東京大学教育学部佐治守夫教授）の一部として行なわれた。

## 文 献

- Cozby, P. 1973 Self-disclosure: a literature review. *psychol. Bulletin*, 79,2,73-91
- Drag, L.R. 1968 Experimenter-subject interaction: a situational determinant of differential levels of self-disclosure. Unpublished master's thesis, University of Florida
- Ehrlich, H. J., & Graeven, D. B. 1971 Reciprocal self-disclosure in a dyad. *J. Experimental Soc. Psychol.*, 7, 389-400
- Himelstein, P., & Kimbrough, W. W. JR. 1963 A study of self-disclosure in the classroom. *J. Psychol.*, 55,437-440
- Hurley, J.R., & Hurley, S.J. 1969 Toward authenticity in measuring self-disclosure. *J. Counsel. Psychol.*, 16, 271-274
- Jourard, S.M. 1964 *The transparent self*. Princeton: Van Nostrand, 「透明なる自己」岡堂訳 1974 誠信書房
- Jourard, S.M. 1971 *Self-disclosure*. Wiley-Interscience
- Jourard, S.M., & Lasakow, P. 1958 Some factors in self-disclosure. *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 56,91-98
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造. 心理学モノグラフ No.14, 日本心理学会, 東大出版会
- 久世敏雄, 蔭山英順 1973 「困った場合」における自己開放性についての一研究. 青年心理学研究会編「わが国における青年心理学の発展」VII, 金子書房, 151-170
- Pederson, D.M., & Breglio, V.J. 1968 The correlation of two self-disclosure inventories with actual self-disclosure: A validity study. *J. psychol.*, 68,291-298
- Pederson, D.M., & Higbee, K.L. 1968 An evaluation of the equivalence and construct validity of various measures of self-disclosure. *Edu. Psychol. Measurement*, 23,511-523
- Stanley, G., & Bownes, A. F. 1966 Self-disclosure and neuroticism. *Psychol. Reports*, 18,350
- Truax, C. B., & Carkhuff, R.R. 1965 Client and therapist transparency in the psychotherapeutic encounter. *J. Counsel. Psychol.*, 12,3-9
- Truax, C. B., & Wittmer, J. 1971 Self-disclosure and personality adjustment. *J. Clinical Psychol.*, 27, 535-537

## (付) 自己開放性質問紙 (ISDQ) の項目

1. 好きな音楽, 嫌いな音楽。(L)
2. 国鉄料金の値上げについて自分がどう思っているか。(L)
3. どんなスポーツをやっているか。やったことがあるか。(L)
4. 今まで異性を好きになったことがあるか。(L)
5. どんなスポーツを観戦するのが好きか。(L)
6. 学校の先生をどう思っているか。(L)
7. 自分が今(もしくは、かつて)どういう宗教的活動を行なっているか。(いたか) (H)
8. 支持する政党は何か。(M)
9. 自分が一番好きな映画。(L)
10. 学生時代の一番楽しかった思い出。(L)
11. 現在自分はどれくらいの収入を得ているか。(H)
12. 自分の一番好きな娯楽。(L)
13. 最近の性風俗についてどう思っているか。(M)
14. 自分の好きな食物は何か。嫌いな食物は何か。(L)
15. 自分の好きなテレビ番組は何か。(L)
16. 学校ではどんなクラブに属しているか。(いたか) (L)
17. どんな酒が好きか。(ビール, ウィスキー, 日本酒など) (M)
18. 自分をこういうふうに育てた両親への不満。(H)
19. 異性に対してどういう点に魅力を感じるか。(L)
20. 自分の特技, 余技, 趣味, 資格, コレクションは何か。(L)
21. 好きな歌手, 俳優, スポーツ選手は誰か。(L)
22. 自分の父親の職場名, 地位は何か。(M)
23. いくらくらい借金をしたことがあり, その借りた相手は誰か。(H)
24. 自分の学歴についてどう思っているか。(M)
25. 一人で何かやるのと, みんなでやるのと自分は主にどちらが好きか。(M)
26. 女性差別について自分はどう思うか。(M)
27. 自分の生れた町はどこか。(M)
28. 自分の恋人や配偶者の気に入らないところ (H)
29. 婚前交渉, 夫や妻の浮気についてどう思うか。(M)
30. どれくらい貯金しているか。(H)
31. 自分の勉強(仕事)をする上でハンディに思っていることは何か。(M)

32. どんな色が好きか。(L)
33. 今の自分の勉強(仕事)から,どんな満足を得ているか。(M)
34. どんな所へ旅行したか。(L)
35. 自分のした進路選択をどう思っているか。(L)
36. 価値観のちがう人と結婚することについて自分は思うか。(M)
37. 自分が受け入れたくない思想は何か。(M)
38. やらなければならないのに,やりたくない勉強(仕事)は何か。(M)
39. 自分はまだ未熟だ,バカだなあと感じるのはどういうときか。(M)
40. 人間にとって教育はどのくらい重要だと思っているか。(L)